

クロイツフェルト・ヤコブ病診断以前の脳外科手術事例について

1 現状

これまでのWHO、英国インシデントパネル等の報告では、手術器具等を介してCJDが感染するという科学的根拠は得られていないものの、脳神経外科手術を受けた患者が、後にCJDと診断された場合、同一の手術器具を介したCJD二次感染のリスクを完全には否定できない。

我が国においては、平成16年9月以降、CJDの診断以前に脳神経外科手術が行われた事例が5例報告されている。

前回の本委員会以降、同様の事例が更に3例あったことが明らかとなった。これらの事例について、クロイツフェルト・ヤコブ病サーベイランス委員会の意見等をふまえ、同一の手術器具を使用した患者のうちリスク保有可能性者と考えられる者に対して、必要な対応を行うよう当該医療機関に対して指導を行った。

2 医療機関への対応

1) 6例目

平成13年に脳神経外科手術を受けた後に孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病と診断された症例について調査を行ったところ、同病院では当該症例への手術後、異常プリオンタンパクに対する特別な処理法がなされないまま、同一手術器具を用いて4名の患者に対し脳神経外科手術を実施したことが判明した。

同病院に対しては、この4名のうち存命中の2名への説明を実施すること、また、今後長期間にわたる定期的な診察等のフォローアップを実施することについて指導を行った。

なお、この2名への説明は実施済みである。

2) 7例目

平成14年に脳神経外科手術を受けた後に孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病と診断された症例について調査を行ったところ、同病院では当該症例への手術後、異常プリオンタンパクに対する特別な処理法がなされないまま、同一手術器具を用いて28名の患者に対し脳神経外科手術を実施したことが判明した。

同病院に対しては、この28名の患者のうち存命中の22名への説明を実施すること、また、今後長期間にわたる定期的な診察等のフォローアップを実施することについて指導を行った。

なお、この22名の患者への説明は実施済みである。

3) 8例目

平成18年に脳神経外科手術を受けた後に孤発性クロイツフェルト・ヤコブ病と診断された症例について調査を行ったところ、同病院では当該症例に使用した手術器具に対して異常プリオンタンパクに対応した処理法が行われていたものの、バイポーラーについては必要な処理が行われなかったことが判明した。

同病院に対しては、同一のバイポーラーを用いて脳神経外科手術を行った23名の患者のうち存命中の21名への説明を実施すること、また、今後長期間にわたる定期的な診察等のフォローアップを実施することについて指導を行った。

なお、この21名の患者への説明は実施済みである。